Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-04

Effects of occupational therapy on hospitalized chronic schizophrenia patients with severe negative symptoms

Tatsumi, Eri

(Degree)
博士（保健学）

(Date of Degree)
2012-03-25

(Date of Publication)
2012-09-05

(Resource Type)
doctoral thesis

(Report Number)
甲5423

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1005423

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

（様式３）

論文内容の要旨

専攻領域　医学系研究科保健学専攻

専攻分野　理学・作業療法学領域

氏　　名　巽　絵理

論文題目 Effects of occupational therapy on hospitalized chronic schizophrenia patients with severe negative symptoms （重度な陰性症状を有する統合失調症患者に対する作業療法の効果）

論文内容の要旨

重度な陰性症状を有する統合失調症患者は，他者に対する緊張が高く，状況変化に脆弱な傾向があるため，他者との関係を拒否し，自閉的な生活を送る傾向がある．この対人関係の障害や陰性症状の治療は，薬物療法を始め様々な治療法があるが未だ充分な効果が得られていない．作業療法(OT)は，作業に参加する機会を作り，他者と非言語的コミュニケーションを用いて交流するため，陰性症状や対人関係障害の改善に有用と思われるが，その効果を十分に検証されていない．そこで本研究において，重度な陰性症状を有する統合失調症患者を対象として，調理を用いた OT(調理 OT)のランダム化比較試験を実施し，調理 OT の効果を検証した．

本研究は，2 か所の精神科病院において入院中の統合失調症患者 65 名を対象とした．そのうち研究の同意が得られた 38 名を，無作為に調理 OT 群 19 名と対照群 19 名に分けた．調理 OT 群は，平均年齢 57.6±12.8 (mean±SD)歳，入院期間 6.0±9.9 年，対照群は，57.7±14.1 歳，7.6±10.7 年であった．患者属性は，2 群間に有意な差はなかった．介入方法は，調理 OT 群は調理と茶話会を，対照群は茶話会のみを週 1 回 1 時間 15 回実施した．評価指標は，症状評価として Brief Psychiatric Rating Scale (BPRS)と Scale for the Assessment of Negative Symptoms (SANS)を，社会生活技能として Rehabilitation Evaluation Hall and Baker scale (Rehab)を，気分として Profile of Mood States scale (POMS)を，そして，対人関係技能として Personal space(着座位置)を用いた．着座位置の測定方法は，面接者に対して 90 度・400cm の位置においてある椅子を患者が好きな位置に動かして座り，その位置の角度と距離を実測した．$p<0.05$ を有意水準とした．

結果は，介入前(前)，介入後(後)の 2 群間比較は，全項目に有意な差がなかった．群内比較において，SANS 総得点では，調理 OT 群は前 96.0±23.8 (Median±IQR)点，後 92.5±31.0 点と有意な改善が見られた($p=0.033$)．下位項目の意欲発動性の欠如(前 17.5±4.8 点，後 15.5±7.0 点($p=0.022$))と，快感消失・非社交性(前 20.5±4.8 点，後 18.5±8.5 点($p=0.016$))が有意に減少した．一方，対照群は全項目改善しなかった．POMS 総合得点は，調理 OT 群のみに有意差(前 26.0±49.0，後 12.0±47.0($P=0.018$))がみられ，怒り-敵意(前 7.0±10.5，後 5.0±8.0($P=0.028$))も有意に減少し，気分の安定化が得られた．着座位置の角度について，調理 OT 群は有意に(前 65.3±27.0cm，後 48.7±20.2cm($p=0.015$))減少し，面接者に対して正面方向を向く変化がみられた．しかし対照群は変化しなかった．着座距離は，調理 OT 群(前 220.6±157.4cm，後 111.0±81.0cm($p=0.013$)) 対照群(前 248.9±150.1cm，後 135.3±103.8cm($p=0.040$))ともに有意に近くなった．BPRS と Rehab は，両群ともに有意な改善はなかった．

本研究結果から，調理 OT は，着座角度の変化から治療者と向きあえる関係性を構築することに役立った可能性がある．また SANS の有意な改善から，この調理 OT は，患者の意欲を高め，社交性を高め，ひいては陰性症状の改善に寄与した可能性が示唆された．さらに POMS の総得点と怒り-敵意の有意の減少から，調理 OT は，患者の治療者に対する警戒心を軽減し，気分の安定化をもたらした可能性が示唆された．今回用いた調理 OT は，患者が作業のゴールを認識し，患者の身体を用いて，段階付けられた作業に参加するという要素が含まれ，これは OT の構成要素としては重要かつ一般的なものである．したがって，調理という特別な作業の患者への効果とするよりも，三要素を満たす OT が効果的であったと解釈するのが適切であると考える．

重度な陰性症状を有する統合失調症の心理社会的介入の実証的な効果を証明した研究はほとんど無い．本研究は作業療法による重度の症状改善を目標としたが，介入期間や対象者数が十分であったとは言えず，明確に効果があるとは言えない．しかしながら群内比較における有意差とはいえ，調理 OT 群内の介入前後で改善を認めたことは，今後の心理社会的介入の方略を考慮する際に，重要な基盤データになり得ると考えられる．

指導教員氏名：橋本　健志

（別紙１）

論文審査の結果の要旨

氏　名	巽　絵理		
論文題目	Effects of occupational therapy on hospitalized chronic schizophrenia patients with severe negative symptoms 重度な陰性症状を有する統合失調症患者に対する作業療法の効果 （外国語の場合は，その和訳を併記すること。）		
審査委員	区　分	職　名	氏　　名
	主　査	教授	橋本　健志
	副　査	教授	種村　留美
	副　査		印
	副　査		印

要　　旨

重度の陰性症状を有する統合失調症の治療において，薬物療法などの生物学的治療は十分な効果を示さないことから，心理社会的治療への期待は大きい。その中でも，作用療法は言語だけでなく非言語的コミュニケーションを用いて患者にアプローチできることから，自閉的な生活になりやすい重度の統合失調症に対しても適応可能であり，実際に薬物療法登場以前から実施されてきた。しかし，その効果をランダム化比較試験によって実証した研究は無い。そこで，本研究は，重度陰性症状を有する統合失調症患者に対して，調理を用いた OT(調理 OT)を実施し，その効果を検討した。長期の罹病期間と入院期間を有する統合失調症患者 38 名を，無作為に 2 群に分け，介入群には調理 OT 群を週 1 回 1 時間 15 回実施した．調理 OT 群では，介入後に陰性症状，気分，物理的な対人距離・角度の改善を認めたが，調理ＯＴ群と対照群の 2 群間の比較では，介入後に有意差は認められなかった。調理 OT 群における改善は，陰性症状の改善，気分の安定，物理的な対人距離・角度の改善であった。論文提出者は，この結果から，重度の陰性症状を有する統合失調症に対する心理社会的介入を実施する際に，作業療法的手法が重要であると考察した。

研究のアイデアは独創的であり，解析手法も適切である。2 群間では差がなかったが，罹病期間・入院期間が長期にわたり，通常医療では改善が困難な患者に，15 回の調理 OT 介入によって改善を認めたということは，精神医療全体の視点から見て意義が大きい。今後，対象者数を増やし多施設研究を実施することによって，本研究の結果は診療報酬にも影響をもたらしうると考える。以上から，本論文は博士論文としての資質を有するものと判断する。よって，学位申請者の巽絵理氏は，博士の学位を得る資格があると認める。

掲載論文名・著者名・掲載（予定）誌名・巻（号），頁，発行（予定）年を記入してください。

Effects of Occupational Therapy on Hospitalized Chronic Schizophrenia Patients with Severe Negative Symptoms. Tatsumi E, Yotsumoto K, Nakamae T, Hashimoto T. Kobe J. Med. Sci., Vol. 57 , No.4 , 2011.